

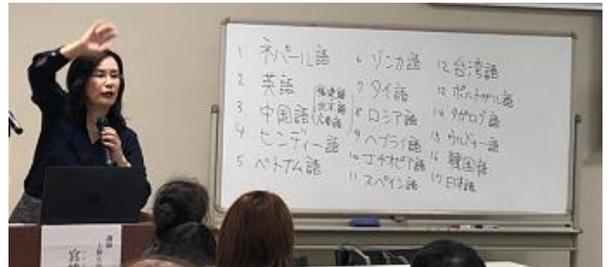
ワタシはナニモノ？ことばのちから

日本には外国人の子ども達がたくさん暮らしています。彼ら彼女らが日本に来た時期や国籍は様々ですが、日本で暮らしていくために日本語を習得しなければならないという事は共通しています。認定 NPO 法人 外国人の子どものための勉強会は、外国人の小学生と中学生のための日本語教室を週 4 回、松戸市で 20 年以上続けてきました。また学習支援にとどまらず先輩との交流会やバスハイクなどの企画も行い、外国人の子どもたちが学校とは別に心開ける居場所を提供しています。

9 月 29 日(日)松戸商工会議所会館で、講演&ワークショップ『母語も大切に』～外国にルーツを持つ親子のために～が開催され、勉強会に参加している親子をはじめ 80 名以上が集まりました。チラシにも記載されていましたが、冒頭の主催者挨拶でもエッコロ福祉助成を活用して開催した旨の紹介がありました。講師は宮崎幸恵氏(上智大学短期大学部教授)で、外国にルーツを持つ子どもたちには母語も大切である事を知ってもらい、一緒に考えようという内容でした。

<バイリンガル？母語とは>

講演の最初に自分が使える言語はいくつあるか自己紹介し合ったところ、ほとんどの方が 2 か国語以上話せるバイリンガルで、1 つの言語のみを使うモノリンガルは日本人だけでした。会場内にはなんと 17 か国語以上の言語があり衝撃を受けました。しかし「聞く・話す・読む・書く」の 4 つ全て出来るかとなると少し違ってくるようでした。母語とは、生後数年間のうちに生活環境のなかで自然に身につけた第一言語という意味で、通常は母親のことばを母語と言うそうです。母語は親が一番上手なことばであり、母国語とは違いました。



<家では日本語は使わない>

子どもが日本語ばかりになり母語を忘れていくと、親の言っている事が分からなくなり、親に相談が出来ず安心できる場所を失う事になるかもしれないそうです。また親の文化やコミュニティに愛着がなくなり自分のルーツを失うと、アイデンティティの崩壊(ワタシはナニモノ?)や自己肯定感の喪失を招く恐れもあるそうです。

母語は親子の絆にとってとても重要なものでした。また子どもが大きくなるにつれて勉強が難しくなってきますが、特に抽象的な事は母語で理解していると日本語で学んでもインプット力が違うそうで、情報の理解力にも影響する重要なものでした。子どもが小さいうちは親が一番上手なことばで話しかけ、なるべく母語を忘れないようにする事が、子どもの心の発達や学校の勉強にも関係がある事を学びました。

<未来を支えるちから>

バイリンガルの注意点は「1 つの言語が良く出来る」状態でなければならない事です。「聞く・話す」の会話力に加え「読む・書く」も母語で年齢相当の力を身につけておく事が大切です。ワークショップでは勉強会で日本語を学んだ先輩達が登壇し、今までの経験や現在を話してくれました。どの子もある程度まで母語で過ごしていたようで、必死に日本語を学び辛い事も楽しい事も経て頑張っている事が伝わりました。外国人の子も日本人の



子も未来を支えるちからです。個性を尊重しながらことばのちからを学び支援していく事は、グローバルな人材を育てるきっかけにもなります。日本で暮らす子ども達がことばの壁で未来の可能性を狭められる事のないよう、この勉強会のような活動が世の中にもっと広がって行く事を期待します。